



25歳の時から15年間勤務した山形県立酒田東高校は、

私を英語科教師として育ててくれた学校です。同校に赴任しなければ、きっと私は今とは違った教師になっていたはずですが、

当時の酒田東高校の雰囲気は、一言で言えば自由。私は11歳上で既に赴任8年目だった渡部環一先生はじめ、力のある教師が各々のスタイルで指導していました。しかし、初めて進学校にやってきた若手の私にとっては、もちろん甘い世界ではありませんでした。

授業が始まってすぐ、ある先輩からテスト問題の作成と採点を依頼されました。私は「採点はいつまでですか？」と尋ねたところ、当然といった顔で「翌日です」。「270枚はあります」と思わず言うのと、「どうぞせ家にいたってやることないでしょ！」と笑われる始末。先輩曰く、「何日もたつてから答案を返しても、生徒の気持ちは冷めてしまっているので指導にながらない。だから必ず翌日には採点して返しなさい」。結局テスト当日は、部活動の後に徹

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

教師歴30年の自分の在り方はあの徹夜で決まった

山形県立新庄北高校最上校教頭 森 政行 MORI MASAYUKI

人の成長は、一瞬の気付きから始まる自己研鑽の積み重ねだ。

そして気付きを誘発するのは出会いと、そこで与えられる言葉である。

初めての進学校勤務で試行錯誤を続けた若手時代から、

より一層生徒に合った指導の在り方を検証し、

それを校内で共有する旗振り役へと成長していった

山形県立新庄北高校最上校教頭の森政行先生。

教師として決して忘れられない気付きの日々を振り返る。

夜で採点しました。

これが地域の期待を担う高校か、と気付かされることは多々ありました。しかしその一方で、指導法などを先輩から細かく指示されることはありませんでした。大切なことさえ押さええたら、あとは若手といえども自分で考えなさい、というわけです。ただし、先輩たちと話をする

機会はとて多い学校でした。

はつきり言えば、とにかく飲み会が多かった。月2、3回は当たり前。もちろん飲めば必ず生徒の話です。そうして、渡部先生ら先輩の考えに学内外で触れるうちに、自分ももっと挑戦したくなりました。毎日1題の大学入試問題を解くことを自分に課しましたし、オールインゲ

リッシュの授業を行った時期もありました。ただ、今振り返ると、渡部先生たちに付いて行く

うと必死で、自分の知識をとにかく生徒にぶつけるような教え方でした。渡部先生とは最初の5年間だけ一緒にさせていだいたのですが、私の印



5年間だけ一緒にさせていだいたのですが、私の印

先輩教師の言葉

人を育てるのは言葉であることをもっと自覚していい

元・山形県立鶴岡北高校校長 WATANABE YOICHI 渡部環一



当時の酒田東高校は教科分掌などを超えて、教師が

自由にものを言えました。しかし、最初からそうだったわけではありません。私が赴任した当初は、「ペテランに黙って従うべき」という空気ででしたから。それが変わっていったのは、そんな中でも若手が物怖じせず、意見を言っていたから。風通しの良い職場は、若手が勇気を出して発言することでつくられるのだと実感したものです。だから、赴任直後から自分の考えをしっかりと述べる森先生の様子を見て、頼もしく感じました。しかし、ペテランの存在ももちろん大きい。若い人たちの中に教師としての土台をつくっていくのは、やはりペテランの言葉だと思えます。今回私は、森先生が「テストは翌日まで返却しなさい」という一言を



右より・まさゆき 英語科。宮城県の専門学校に2年間勤務した後、山形県へ。酒田東高校、山形県教育委員会、霞城学園高校、山形南高校などを経て、現在、新庄北高校最上校教頭。
左わたなべ・よういち 英語科。酒田東高校での13年間の勤務の後、酒田市教育委員会、山形北高校、酒田中央高校などを経て、2004年度から05年度まで鶴岡北高校校長を務める。

象はきつと、「必死でもがいて
いる若造」だったはずだ。
転機になったのは30代になっ
てすぐ、県の「普通科活性化事
業」の指定を受け取り組んだ英
文法の自主教材制作でした。酒
田東高校の生徒に合った効率的
な教材、教え方は何か、じつと
りと考える機会になりました。
またこの頃、高校入試の結果か
ら新入生の弱点を分析し、それ
を踏まえた年間課題を4月の時
点で生徒に配布し始めました。



無我夢中だっ
た指導に自分
なりの戦略が
生まれ、3年
間の指導で「山場」がどのな
かも分かるようになりました。
赴任10年目を迎えた頃、教師
の入れ替えが進み、酒田東高校
の職員室は一気に若返りまし
た。指導ノウハウの継承・共有
の必要性を感じた私は、学年団
で外部模試の平均点予想会を企
画しました。該当教科の若い教

師が問題を解き、翌日までに校
内・全国平均点を予想し、点数
が最も外れた教師が飲み会を主
催するというものです。模試の
結果を待たずに指導の手立てを
いち早く考えるための方策でし
たが、教師の教科指導力を高め
るのに最適の場になったと思っ
ます。ちなみに私は一度も主催
側になつたことはありません。
酒がからむと強いんです。
赴任した当時の酒田東高校は
教師個々の力で勝負していまし

ただ、15年たつても変わらな
いものもありました。それは、
目の前の生徒を何とかしたいと
いう熱意です。地方公立高校の
生徒の志はまさに多様ですが、
それでも全員の志望をかなえよ
うと、教師は日々努力していま
した。だから、渡部先生たちは
皆、夜遅くまで働いていたし、
私も徹夜してでも翌日までに採
点しなければならぬという気
持ちになったのだと思います。
確かに多忙な15年間でした。

たが、十数
年たつて教
師も生徒も
変わり、今
度は組織力
が必要にな
つたので
す。同じ学
校でも時代
に応じて方
策は変わる
のだと思っ
ます。
酒田東高校に行かなければ、今
の自分はなかつたと思います。

ずつと忘れず
にいたことを
知り、感動し
ました。彼は
なぜそうすることが必要かを考
え、指導の本質までたどりつき、
それを自分の成長の指針としま
した。先輩の言葉をきちんと受
け止めた森先生も素晴らしいけ
れど、後輩と向き合つてやるべ
きことをしっかりと伝えた先輩
の存在も見逃せません。現場の
教師は、お互いの言葉、働き掛
けが人を育てるきっかけになっ
ていくということをもっと意識
すべきではないでしょうか。考
えてみれば、それは生徒との関
係でも同じなものですから。
それにしても、あの頃の酒田
東高校は飲み会が多かつた。も
ちろん、飲んだからといって良
い学校になるわけではありませ
んが、日々の指導をざつぱら
んに語り合えたのは事実です。
教科、学年、分掌といろいろな
集まりがありました。森先生は
「独身会」に入っていましたね。
私が入っていたのは「惨め会」。
いつも夜遅くまで仕事している
連中とこっそりと結成していま
した。生徒が学校にいる間は机
に座つて仕事は出来ません。教
材研究などが出来るのは、生徒
が帰つてから。夜中まで働くこ
とを惨めと自嘲しながら、その
ことに誇りを持つていたことは
言うまでもありません。

